

富岡市の知的障害者授産施設「センプ水士舎」(金谷透施設長)が、生ごみの有効活用に乗り出した。市内の民間企業の残飯を引き取って養鶏用飼料化するとともに、鶏糞はたい肥化して利用している。同施設は飼料代削減やニワトリの良好な生育に役立つと歓迎。企業も処理費の節減につながるなど、双方にメリットが生まれている。多くの授産施設や福祉作業所が、不況のおおりで利用者の仕事確保に四苦八苦している中、生ごみ処理は新たな仕事として注目されそうだ。

# 生ごみ活用

## を 残飯を 飼料に

# 企業と連携

### 富岡の授産施設

同施設は、今年九月から同市内の自動車部品製造の「ボッシュオートモーティブシステム富岡工場」(益満亮介工場長)の給食残飯を引き取っている。残飯は熱処理と発酵菌の混ぜ込みを行う機械で処理。数日発酵させた後で給餌する。ニワトリは配合飼料だけよりも、30-50%前後の生ごみが入った飼料を好むという。

金谷施設長は「生ごみ処理を始めたことで、飼料代の節約、利用者の仕事の増加、工場が採卵した卵の有



引き取った給食残飯の飼料化に取り組む施設利用者

力な販売先となった。などに無料で提供しているが、のメリットが生まれた」と将来は希望者に販売する。説明。さらに、鶏糞はたい肥化して周辺の農家など

企業にもメリットがある。これまで、同工場は生ごみは同市の施設で焼却していたが、処理費は月十万円程度かかっていた。水士舎に依頼してからは三分二程度で済んでいる。同工場は「廃棄物削減の一環として、生ごみを有効に使ってもらえる方法を考えた。したが、近くにいい施設があったのでお願いした。コスト節減にもなり、助かっている」と話している。

同工場では利用者三十人がハム・ソーセージの製造販売、探卵養鶏、ブルーベリーの栽培などに携わっている。利用者の平均月額賃金は全国平均の約一万二千円を上回る約二万九千円だが、知的障害者の経済的自立には三万三千円程度必要との考えから、授産収入を増やす仕事を模索している。

金谷施設長は「ニワトリは来年夏までには二千羽とする計画。必要な飼料も増えるので、生ごみ飼料化を徐々に拡大して、施設を支える事業に育てたい」と意気込んでいます。